

Title	辺境政策と国族理論：中国々民党の辺境理論と三民主義
Sub Title	
Author	加田, 哲二 小林, 宗三郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.4 (1940. 4) ,p.553(93)- 582(122)
JaLC DOI	10.14991/001.19400401-0093
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400401-0093">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400401-0093</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 邊境政策と國族理論

——中國々民黨の邊境理論と三民主義——

加田 哲二  
小林宗三郎

近代支那の建設者・孫中山は、その著「三民主義」の劈頭において、支那民族主義とは何にかと云ふ質問に答へて、次の様に述べてゐる。

「民族主義とは如何なることかといへば、中國の歴史上に於ける社會習慣等の状態を按じて、私は只一句を以て簡単に云ひ得る。即ち民族主義とは國族主義のことである。」（改造文庫版・孫中山、三民主義、一六頁）

（註）孫文の三民主義は、一九〇五年一應その外面的完成を遂げ、更に支那革命の遂行と共に漸次内容に修正が加へられて、一九二二―四年の間に完成されて行つたのである。（湘江邑一、三民主義論）そこで、後に述べる様に、民族主義理論も組織的なものから發展的なものへと移行しつゝあつたのである。國族理論は、孫文民族主義の基本部分を形成するものではあるが、弱小民族を併合して行かうとする民族理論の發展的轉換に際しては、聊か足手まとひと成つた感が有る。（本稿 一二二頁参照）

彼は好んで、國族・國族主義の字句を用ふる。此の際、彼は此の字句を以つて、單に民族・民族主義と同意義に解釋し、使用した譯りではなく、實に國族主義をもつて支那民族主義の顯著なる特徴だと考へたのだつた。

「私のいふ民族主義——國族主義——は中國には適當のものであるが、外國人には不適當である」。(同書同頁)  
然らば、所謂「國族主義」の持つ内容は何んであるのか。これは、支那民族主義及び民族運動の特質をなすものである。孫中山は續けて云ふ。

「私は、民族即ち國族といふことは、中國には適當であるが、外國には不適當であると述べた。それは、中國は秦漢以後、都べて一個の民族が一個の國家を造成してゐるが、外國では一民族で數國家を形成せるあり、又一國家内に數民族を有するものがある。英國の如きは現在世界の最大強國であるが、彼等の國內に於ける民族は白人本位で、茶褐色人や黒人を包擁し、大不列顛帝國を成してゐるのである。従つて、英國に於ては民族即ち國族といふ言葉は不適當である。香港にしても英國の領土になつてゐるとはいへ、その内に居る民族中には、數十萬の中國人たる漢人が參加してゐるではないか。又印度にしてもその通りで、三億五千萬の印度人が居るから、國族即ち民族といふことは不適當であらう。御承知の如く英國の基本民族は、アングロサクソン人であるが、アングロサクソンは單に英國のみならず米國にも頗る多い。従つて、外國に於ては民族即ち國族と謂ふことは出來ぬ」。(同書一七頁)

孫中山の所謂「國族」は通常云はれてゐる民族と國家とが何等の矛盾撞着なくして、完全に一體となつた状態をば指し、斯く呼んでゐることが明白となつた。然らば彼は、民族及び國家に對して、それ／＼如何なる見解を持つてゐたのであらうか。更に進んで、分析して見る必要がある。

彼は、民族を以つて自然的所産、國家を以つて武力的所産と見る。

「民族は自然の力で造られたものであるに反し、國家は武力を用ひて出來たものなることは歴史の證明する所である。中國人の所謂「王道是順乎自然」なる一句は、自然力即ち是れ王道にして、王道を用ひて造られたる團體は即ち是れ民族である。武力は即ち是れ霸道であつて、霸道を用ひて成れる團體即ち國家である。香港は決して香港人が英國人を歓迎して出來たものではなくて、英國人が武力を用ひて割據したものである。前に、中國が英國との戰爭に敗れた爲めに、香港の人民と土地が英國に歸してしまひ、今日の香港となつたのである。印度にしても、これと同じ経路を踏んで來たのである。英國人は「英國に日の落つること無し」といふが、一つとして霸道を用ひなかつた領土があらうか。古より今に至るまで、國家を造成するには皆霸道を用ひてゐるが、民族はこれと違つて、自然に由つて出來たもので、少しも無理がない。香港の幾十萬の中國人は團結して一民族を成してゐるとはいへ、これは自然の然らしむる所であるから、英國が如何に霸道を用ひても改變することは不可能である」。(同書、一七一―一八頁)

(註) 孫文は、支那古來の王道・霸道思想をその三民主義の内容に、多分に盛込んでゐる。通常、孫文の思想内容は、新興資本主義國家アメリカ合衆國から受けた民主主義的影響が最も大きいと云はれてゐるが、しかし民族・民權・民生の諸原理は歐米理念から盲目的に借用して來たものばかりではなく、支那の生活・歴史・傳統に巧に統合してゐる所があるのである。

蓋し、これは幼年時代、彼が起居した土地は、太平天國の指導者・洪秀全發祥の地に近く、且つその旗の下に戦つた人々の間に生育した爲であらう。(Yakubovitch: Russia and the Sinitic Union in the Far East, P. 167. 堀江邑一、前掲論文、一六三頁、勿論、その内容が、漸次整備・純化されて行つた事は事實であらうが、一部論者が強調する如く、「孫文の三民主義綱領は支那のブルジョア民主主義革命の現實の諸勢力にしっかりと結びついてゐた。」とは考へられない。(武蔵丸楠、支那革命の歴史、三一頁)むしろ、三民主義は、卓越した孫文といふ個性と、その理想主義の燃ゆるが如き情熱の内に、當時

存在したあらゆる會黨を悉く包容し得る内容をもり込んでゐたのではあるまいか。(加田哲二、中國國民黨の諸派と三民主義、三田學會雜誌第三十三卷第十一號六頁)

孫文によれば、支那に於てだけは、武力的所産たる國家と自然的所産たる民族とが、聊かの矛盾もなく、完全に一致し得たし又、一致し得るのである。云ひ換へれば、自然的所産たる民族は、何等の武力的行動をも伴はずして、國家を形成し得ると云ふのである。この「王道國家論」こそ、支那民族主義の第一の特質である。又、この基礎の上に、民族則國家と云ふ「國族理論」が展開されるのである。

## 二

支那民族史の流れに沿つて眺める時、支那民族主義の第一の特徵である「國族理論」に到達するとするなれば、現實の支那の姿を凝視する時、第二の特徵を見出す事が出来るのである。孫中山によれば、第一の特質は決して現實的なものではなくして、理想若くは回想に過ぎぬのであつた。支那が民族的統一を完成し、民族主義を主張する時が今迄にあつたとしたならば、又は將來あるとするならば、と云ふ假定の下に、その時は必ず國族及び國族主義の形態をとるものであると云ふのである。然るに、現實の支那は國族及び國族主義を所有せぬばかりでなく、民族及び民族主義すらも保持し得ない状態にあるのである。孫中山はこの現状をば「散れたる一片の沙」になぞらへる。

「中國人は家族主義と宗族主義を崇拜するのみで、國族主義といふものが無かつた。或る外國人はこれを觀て中國人は恰も散じた沙のやうなものだと云ふた。その原因は奈邊にあるか。これは一般人民に家族主義と宗族主義があるだけで、國族主義がないためである。中國人は家族と宗族に對する團結力が非常に強大であつて、往々宗教を保護するためには身も家も生命までも犠牲とすることを厭はない。この主義が斯くの如く深く人心に注入されてゐな

がら、國家に對してはこの犠牲的精神を缺如し、中國人の團結力は宗族に止まつて、國族にまで擴びまされてゐないのである」。(同書、一六頁)

勿論、支那が太古よりして民族意識を全然缺如してゐたと云ふわけではない。だが、色々な原因が、かゝる意識をば消滅し盡してしまつたのである。殊に、元・清兩朝に於て、蒙古族と滿洲族とが夫々支配してゐた全期間を通じて、漢人の民族意識は寸斷せられてしまひ、更にその上、阿片戰爭以後滔々として歐米列強の侵略活動が開始せられると共に、この状態は拍車を加へられて、遂には、再び立ち上がられぬ様な状態に追ひ込まれつゝある——これこそ、支那の現實であると云ふのが、孫中山の見解である。

然らば、支那をばこんな状態に押しやつた原因は何んであるか。支那民族主義の第二の特質——民族意識の衰退——の原因へとその論矛は向けられる。孫文は、これに對して自然的壓迫(人口減退等)及び人爲的壓迫(政治・經濟的侵略)の二部面に分けて説明してゐる。而も、支那は今日まで、前者の壓迫からは辛うじて脱し得てゐるが、後者即ち列強の政治・經濟的壓迫からは、現状の儘では最早到底逃れ得られない様に思はれる——と孫文には考へられるのであつた。この間の事情に就ては、既に觸れたものがあるから、こゝでは割愛することとする。(加田哲二、中國國民黨の諸派と三民主義、四一五頁参照)

こゝに注意を要することは、孫文の所謂、「自然的・人爲的壓迫」は、一國々民(殊に支那に於ては國族)を解體・分裂せしめてしまふであらうけれども、常にその民族意識までも消滅せしめてしまふものとは限らないといふ事である。云ひ換へれば、この様な壓迫は、國家を滅亡せしめてしまふかも知れないが、その國家構成員から民族意識——國家構成意識と云ひ得る場合もある——を根底から除き去つてしまふとは斷言し難い。一民族が他民族を征服

した場合、自然、征服民族は被征服民族の獨立した思想を排撃することゝなつて行くので、やがては自分の國も、自分の屬してゐた國民に就ての自覺も次第々々に薄れて行き、遂には完全に忘却してしまふやうな状態に墮るかも知れない。——がしかし、その間には相當期間——長い——反抗時代がある筈である。この反撥力こそ「亡國しながらも民族思想が存在してゐた爲めに、昔の國家を恢復することを得せしめる原素なのである。」

(註) 孫中山は、好例として第一次世界大戰當時に於けるポーランドを引用してゐる。

ユダヤ人は、既に亡國後長年月を経てゐるが、今尙ほ強烈なる民族意識を有つてゐて、特殊な國際民族問題を惹き起してゐる。然るに支那人は、民族の興亡を二度までも味ひながら、遂に完全に民族意識を失喪しつゝあるのである。一體、この相違は何處から來るのであらうか。こゝに於て、孫中山は、支那を正に絶望の深淵に迎かしてゐる原因にと到達する。即ち、世界主義(帝國主義)である。

「中國は何故二度も亡國して、民族思想が失はれてしまつたのか、甚だ奇怪至極のやうに見えるが、これを研究するのは頗る興味あることである。中國は亡國前には文明民族を以て任じ、又強國としての矜持を有し、他の各國を蠻夷と稱し、乃ち世界の中央に居するが故に、自分等の國を中國と呼ぶのであるといひ、大一統と自稱し、所謂天に二日無く、民に二王無しと誇つてゐた時代もあつたが、これは中國にまだ民族思想の存在してゐた亡國以前のことである。」

民族主義より世界主義に進み、歴代の總てが帝國主義の下に別種の民族を征服し、殊に漢の張博望班定遠の三十餘ヶ國を滅ぼした如きは、恰も英國印度會社のクライブが印度の數十ヶ國を收服したのと同様に見えるも、中國では千年來平和主義を實行し、歐洲人の如き野蠻の手段を用はず、所謂王道を以て弱少民族を收服したのである。然

るに猶太は、亡國以來二千年を過ぎても民族思想が尙ほ存在せるに、中國は、亡國僅かに三百餘年で民族主義が全く亡びてしまつた。その原因は何かといへば、云ふまでもなく帝國主義に禍されたからである。」(同書、五〇—五一頁)

(註) 我々の耳馴れてゐる帝國主義乃至世界主義と、孫文の用ひた意義とは甚だ異つてゐる。第一に、この兩概念は往々密接な關係に結び付けられてはゐるが、孫文によつては、完全に無差別に混用せられてゐる。第二に帝國主義も世界主義も、全く歴史的發展に影響せられる事なき、世界的侵略主義の意味に取られてゐる。

世界主義・帝國主義・一層支那風に云へば天下主義は、現下の支那には不適當なる方策である。然るに歐米新文化に浴しつゝある一部支那青年は、三民主義を以つて狹隘極まるものとして排撃し、近代的籠兒である世界主義を主張しつゝある。孫中山は、その猪突的傾向を深く戒めて、これこそ元・清兩朝に入關を許して、國土全體を亡ぼしたる眞因であると論斷する。

確かに、文武周公の時代には、天下主義は支那にとつて必要であり、有利な政策であつたかも知れない。と云ふのは、當時支那は他のいづれの隣邦よりも強大であり、實力を持つてゐたからである。だから、天下主義を唱へることは、天下を收服せしむる絶好の武器だつたのである。云ひ換へれば、この實力こそ、支那に天下主義を生ぜしめ、有利ならしめたのである。然るに、現在は全く事情を異にする。現在の支那は、歐米列強が互ひに覇を争ふ舞臺——半植民地である。こゝで唱へられる天下主義は、甘んじて列強の侵害に口實を與へることに外ならない。人は刀俎となり、我は魚肉とならんとする現狀に於て、支那は何んの爲めに天下主義を主張するのだ。正に、自殺行爲である。



「大凡一の思想が好いか好くないかといふことは、それが我に適するか適しないかといふ點に存し、結局我等に適せざるものは好くないのである。世界上の國家にして帝國主義を遂行し、他國を征服して特殊の地位を保全し、全世界の主人公たらしめんとするならば、これは世界主義で全世界の服従を要望するものである。滿清入關の時も中國人は抵抗しなかつたから亡國したので史司法も起つ能はず、總數僅か十萬の滿人に四億の中國人が征服されたのである。然し若し中國人の大多數が世界主義を提唱して民族主義を講ぜず、何國人が来て皇帝となつてもすべてこれを歓迎し、たとへ將來列強が皆英國に破られ、中國も英國の征服するところとなり、中國民族が英國民族となり英國の國籍に入らねばならぬこととなつたとしたら如何であらうか。又米國が中國を征服しようとするればこれを幫助するか。即ち世界主義に服従するか。試みに問ふ、我等の良心は何等の衝動を感ぜぬであらうか。そして世界主義が發達して民族主義の存在が不可能となつたらば、我等は淘汰されて苗族の如く生存する能はざる時が来るであらう。」(同書、五一—五二頁)

支那の現状は危機である。こゝに、孫中山は、竹棒と彩票の比喩論をもつて、その打開策を暗示する。これを要約すると、次の様な話なのである。會て、彼が直面した事實談であるが——香港埠頭で毎日々々唯一本の天秤棒を元手として働いてゐた一苦力があつたが、長い間の努力の結晶として十幾圓を手にする事が出来た。この男は、これでもつて當時流行してゐた呂宋彩票を一枚買った所が、偶然にも、頭彩になつてしまつたので、數日後には彼は十萬圓近い金を持つ資産家となつたのである。勿論、有頂天になつた彼は、既に不要となつた竹棒を惜氣もなく海中に投げ込んでしまつたのである。話はこれまでであるが、孫中山は付言して云ふ。

「この比喩の呂宋彩票は世界主義といふ大金を儲けるもの、竹の天秤棒は民族主義といふ商賣道具、一等當選は中國の帝國主義が頂上に達して世界主義を實現し、世界の人がみな進貢するといふ黄金時代であるとすると、その時が來れば民族主義も不用となり、竹棒も海へ投げすてゝよいことになる。」(同書、五四頁)

だが、現在の支那はそんな時代ではない。會ては、そんな時代であつたかも知れないが少くとも今はそうではない。  
5。  
「近來の學生中には、世界主義を提唱し、民族主義は世界の潮流に逆行するものであると云ふものがあるが、これは、英國若くは米國か、我等の祖先の全盛時代に唱へるならば首肯し得るだらう。しかし、現在の中國が唱へるのは不適當である。獨逸は前に民族主義を講ぜず、世界主義を高調したが、今日の獨逸は恐らく世界主義を講ぜず、民族主義を講ずるものであらう。我等の祖光にしても、竹の棒を捨てなかつたらば、我等も一等に當選することが出来たのであつたが祖先の竹棒を捨てたのは大に早や過ぎた。惜しい哉、祖先は一等に當選する彩票が竹棒の中に藏されてあることを知らなかつたのである。」(同書同頁)

現在の支那が爲さなければ成らぬことは、祖先が放棄してしまつた竹棒を再び拾ひ上げることにあるのだ。徒らに過去にあつた華々しい頭彩の夢にふけり、その影のみを追ふことは無駄なばかりでなく、實に支那を危殆に赴かしむるものである。孫中山は、この様に戒しめる。

「今後我等中國人が民族主義を恢復すれば、外國の政治力と經濟力がどんなに壓迫して來ても決して滅亡せず、我民族は永遠に存續する。」(同書、同頁)  
支那民族主義の恢復——即ち漢民族の國家建設は達成されなければ成らない。孫中山の所謂、國族及び國族主義の完成である。

「一片散沙」と「國族理論」——これが支那民族主義の特徴であり、又、現實と理想の姿である。清朝の失政と歐米資本主義の侵略の重壓の中から生れ出でた三民主義——その民族主義理論の本質はかくの如きものであつた。

## 三

孫中山は「三民主義とは救國主義である」と主張する。この救國運動の實踐である近代的支那の建設は、あくまでも國族社會の完成に則するものであつた。

然らば、これに用ふる方策に就いて、彼は何を選んだか。孫中山は、二つの部面からこれを説明する。

第一は、支那民族に加へられたる自然的壓迫に對抗する力を涵養する事である。孫中山が三民主義中、六講に分けて論述してゐる民族主義は即ちこれである。こゝに於て、個々の支那人及び全體としての支那民族の素質は向上し、その實力は蓄積せられる。

例へば彼は、人口減退に不安を覚え、その生育を奨励する。

「百年前 英國のマルサスが人口論を創設したときに、佛蘭西人は大にこれを歓迎し、種々なる自然的方法のみならず、人爲的方法を用ひて人口の減少を實行し、今日に到つて人口の過少に苦しんでゐる。然るに中國の現代新青年中にマルサスの學說に感染してゐるものあるはよろしくない。須らく民族は永久に保存しなければならぬものである。」(民族主義、第一講)

「百年後に於ける全世界の人口は幾倍にか増加することであらう。獨逸や佛蘭西にしても、大戰後、戦前の状態に恢復しようとし、人口の生育奨励をしてゐるから、必ず二三倍の増加を見るであらうが、全世界に於ける土地と人

口を比較すれば、もはや現在に於ても已に人口充滿の患ひがある。或人は這次の大戰を評して、太陽の位置を争ふた戦争である。歐洲の列強は大半寒帯に近いため、彼等は皆赤道地方や温帯の土地を得んとして争つたのが原因となしてゐるのである。従つて太陽の光の争奪戦と云ひ得ると。中國は世界中で氣候が最も温和であり且つ物産の最も豊富な地方なるに、各國人の併呑する能はざりし理由は、彼等の人口が中國の人口より過少なためであつた。しかし、今より百年の後、我等の人口が増加せざるに彼等の人口が非常に多く増加した場合には、多數の彼等に少數の我等は征服され、併呑されるに相違ない。若しもそんな時が來れば、中國は主權を失ふばかりではなく、亡國となつてしまひ、他民族に消化され、人種は滅びてしまふ。」(同上)

殊に、民族主義第六講は、彼の民族精神陶冶に關する重點である。この項に於て、孫中山は「新文化」の侵入によつて舊道德として排斥せらるゝ儒教々義及び政治哲學が如何に必要なものであるかを力説する。更に亦、幾千年以前には外國に比べて遙かに優れてゐながら、現代の支那はこれに遠く及ばなくなつてしまつた諸科學に關する知識も、新しき支那を作り上げる爲に無くてならぬものであると論斷する。

これらの普及發達は、一面支那人の理性を覺醒せしめると共に、他面その道德の向上を來し、更に漸次増加して行く人口を加へることによつて、質的にも量的にも支那民族を強化して行くのである。かくて「中國一國だけで十個の強國を成したと同様」な新支那が育成されてゐるのである。

第二に、孫中山が採り上げた方策は所謂「人爲的壓迫」を一掃し得る力——云ひ換へれば政治・經濟的實力を支那民族に與へんとすることであつた。それは、半植民地たる現在の支那に近代的な政治型態を備へ、その生産諸力を發展・擴充せしむることである。具體的に云へば、清朝とこれが後繼者たる舊軍閥の打倒によつて民權主義を實現

し、歐米資本主義の侵略を排撃して土着資本を厚生的に育成せしめて民生主義に到達し、更にこの土臺の上に全支那民衆を大同團結せしむることであつた。(加田哲二、中國々民黨の諸派と三民主義、參照)

民権主義六講と民生主義四講は、この間の事情を説明したものである。その内容は、「倒滿興漢」を目的とする各種の會黨を限なく包容し得るに足る内容なのである。

(註) 清末、如何に多くの會黨が存在したかといふ事の一例として薛農山は浙江省の例をとつて次の如く云つてゐる。

『例へば浙江省の如きは、處州には王金寶の組織する「雙龍會」あり、衢州には劉家福の「九龍會」、浦江には杜亦勇の「千人會」、嚴州には濮振聲の「白布會」、紹興には竺紹康の「平洋黨」、嵊縣には裘文高の「烏帶黨」あり、其他「金錢黨」「祖宗教」「百子會」「白旗會」「紅旗會」「黑旗會」「八旗會」等々の如き名稱がある。僅に浙江一省の會黨について論じても、名稱は已に斯如く複雑である。其他の諸省も思ふて知るべし。』薛農山 中國農民戰爭之史的研究 下冊 四四六頁

この事は反面から見ると、甚だ具體性に乏しい、漠然たる内容だとも云ふことが出来る。そこで、三民主義の内に総合的に包含されてゐた民族、民権、民生の理論が、果して「現實」に何を意味しなければならぬかといふことは、やがて、封建制に對する破壊が一應完了し、その目的とした舊軍閥が掃せられたる時、人々の胸の中に再び浮び上らなければならぬ問題であつた。このことに就ては、既に觸れた事もあるし、他の機會に再び取り上げる豫定であるから、こゝではこの程度に止めて置く事とする。

## 四

かくの如き内容の三民主義をもつて、全支那を更生せしめんとする國民革命の實踐は、一九二六年七月總司令蔣介石の推行せる北伐となつて現れたのである。七軍に分つて廣東を發した革命軍は連戰連勝、青天白日の旗の行く

ところ反革命軍閥は到る所に敗退したのである。同年九月、早くも武漢三鎮を奪取し、十一月には九江會戰に孫吳軍の主力を撃破し、更に張作霖を中心とする「討赤聯合軍」を追つて北上し、一九二七年初頭には、江南諸省を國民黨政權の膝下に收めたのである。

しかし、北伐の完成・國民政府の樹立に至る経路は、決して坦々たるものではない。既に孫中山は再三・再四北伐計畫を立て乍ら、遂に失敗に終つてしまつたのである。そして、一九二五年三月十二日、奉直戰中に行はれた馮玉祥の北京クーデターの善後處置に關する奉天派・西北派・國民黨の聯合會議に出席する爲、數々の理想を懷いて北上中「革命尙未成功、同志仍須努力」の遺囑を残して客死したのであつた。

(註) 廣州事件(一八九五)惠州事件(一八九九)を経て一九一二年の武漢革命は、清朝を倒した。

「清帝の退位が實行されるに至つたことは、一面確かに彼(孫文)筆者の力によるものではあつたが他の一面において、民主主義革命は、全く不徹底なものとして中絶せしめられてしまつた。かくして、第二革命第三革命と、ひきつゞいて起されなくてはならないことになつた。(佐野袈裟美 支那近代百年史 下卷 三三六)

この難事業を孫文の後繼者達は、どうして易々として完成させる事が出来たのか。勿論孫中山が切り開いて來た道が、大いに貢献したことは云ふまでもない。しかし、この大先輩の苦難の道にもまして、大きな役割を果たしたものは、國民黨の改組である。改組によつて近代的な階級闘争理論と反帝國主義理論をたづさへた中國共產黨が参加して來た。更に、この理論上の武器に加ふるに、北伐途上に於いて次ぎ／＼に結び付いて來た軍閥は、實力上の武器を提供したのである。この軍閥の参加をも改組の中に含めるのは、聊か當を失するかも知れないが、これによつて、その軍事的・政治的地盤は一舉に擴大・強化され、その北伐が短時日の中に見事に達成せられたのであると云ふ事が



出来るであらう。

(註) 舊軍閥と國民黨が、三民主義に對して、互に歩み依つて來た事は事實である。

例へば閻錫山も眞先に三民主義を提唱したし張作霖すらそれに色氣を示し、民徳主義を加へた四民主義を提示したと云はれてゐる。即ち本年六月の半頃(一九二五年筆者)張作霖は山西の閻錫山から頼りに南北妥協條件の一つとして三民主義の承認服従を求めて來た時、「支那は三千年來、禮儀廉耻の四維を以て、立國の原則としてゐる。故に三民主義に加ふるに、民徳を以てし、四民主義としたい」と提唱した。その後各方面に反共産、討赤、排露の聲、益々高まるや、武漢政府の方でも、漸次その赤き色彩を薄くし、ポロヂン氏すら「共産主義は理想に過ぎない。われ等は三民主義を實現するものである」と云ひ、七月以降、共産黨を逐ひ出した後の武漢派はいよいよ明らかに三民主義と共産主義とを別もの扱ひするやうな態度をとるに至つた。(布施勝治 レーニンのロシアと孫文の支那 三九—四〇頁)

しかし乍ら、この北伐決行と共に國民黨内部には解き難い對立が發生してしまつたのである。

第一に、聯俄容共に對しては、改組の當初から既に激烈な抗爭があつたのである。極右派と云はるゝ馮自由一派は、夙に國民黨一全大會に於て反共を聲明した。國民黨右派張繼一派も反共運動を起して、遂に之等の一團は一九二五年十月西山會議を開催すると共に、國民黨内に西山派と呼ぶるゝプロックを暗黙の中に作り上げてしまつたのである。

第二に、軍閥との妥協は、三民主義理論と實踐を甚だ一致し難いものとした。湖南督軍唐生智との協力の場合も、山西軍・乃至東北軍との合同の場合も、双方からの歩みよりがあつた以上、三民主義の信念に對する或る程度の曲節があつた事は否み難い。殊に、北伐が一度完成して以來展開せられた國民黨左右兩派の抗爭、及び蔣介石の獨裁化

に對する全面的な反抗運動をめぐつて、「武力」を有する軍閥のなき込みは非常に重要な意義を持つに至るに及んで、三民主義を中心にした團結は益々緩み、國民黨内の對立・分裂の傾向は著しくなつて行つた。

かくの如くにして、遂に三民主義を中心とした新支那建設——所謂「國民革命」を推行し得るものは、三民主義の信念ではなくなつてしまつた。

孫中山は、三民主義は救國主義であるといふ。「凡そ人が或る一つの事に就て理論的にこれを研究すれば、先づそこに思想が發生する。思想が構成されると信仰が起り、信仰が出來ると力が出て來る。それ故主義は思想に始まり、更にこれを信仰するに至り、信仰の結果、力が出て完全に成立するものである。三民主義は中國の國際上の平等、政治上の平等、經濟上の平等を促進せしめ、中國を永久世界に適存せしむるものである。故に三民主義は救國主義とも云へるのである。吾等は今日中國を救はねばならぬか何うか。救ふことが必要であると認めるならば、三民主義を信仰せねばならぬ。三民主義を信仰して極めて大なる勢力を發生せしむれば、その大勢力を以て中國を救ふことが出來るのである。」(民族主義、第一講)

改組當時も尙ほ、孫中山は思想↓信仰↓力といふ發展を信じてゐたのである。然るに北伐強行によつて生じた黨内部の混濁は孫中山の考へとは正に逆、力↓信仰↓思想の關係と成つてしまつたのである。

實に、優秀なる武力を握り、潤澤なる財源を擁する者のみが、國民黨内部の指導權を掌握することが出來るのである。このディクテーターシップは又、三民主義の内容を指定し得ると共に、その信仰に對する一般の大勢を決せしむるものであつた。

第一に必要なものは「力」であつた。武力と財力とがあつた。改組、北伐以後、殊にめまぐるしき走馬燈の如き反

蔣戰を通じて敢行せられたる一切理論と行動の争闘はこの「力」の奪取にあつた。

## 五

三民主義の所謂「民族」は、主として漢民族に關するものである。この事は、孫中山の行はんとする救國運動——國民革命が、一方に於て歐米列強の壓迫を拂ひのけると共に、他方に於て清朝を主班とする一切の封建的所産を除き去しやうとするにあるので、その合句とするものは「倒滿興漢」にあつたのであるから、これを以つて考へても、民族振興の中心が漢人種にあつた事は當然である。

(註) 阿片戦争時代に於ける清朝は、確に歐米列強とその利害を異にしてゐた。南京條約・天津條約・北京條約と和を講じ乍らも歐米列強とは對抗して來たのである。然るに「太平天國」の建設前後する猛烈な暴動は、清朝と歐米列強との關係を相接近せしめ、殊に、李鴻章が一八六二年來滬して「洋槍隊」と行動を共にするに至つて、その關係は密接となつた。そこで、歐米列強に反對する事は、清朝に反對する事によつて達せられたし、清朝に反對する事は、列強の侵略を阻止するものとも考へられた。或る論者は云ふ。「外國資本主義の侵入は、中國全體の政治と經濟生活中に於いて、明らかに二個の相異つた趨勢を産み出した。即ち一面に於いて滿清政府は外國資本主義の壓力下に屈服投降し、漸次外國資本主義に頼つてその統治を維持する傾勢に赴き、他方に於いて即ち廣大な民衆は外國資本主義と滿清統治の壓迫收取の下に於いて、廣大な滿清統治反對の民衆運動を展開したこと、これである。」(中國現代史研究委員會 中國革命運動史、邦譯、二二頁)

孫中山の國民革命も、かくの如くにして、「倒滿興漢」の中に、列強の侵略排撃と封建制度の打倒といふ目的を達し得らるると考へてゐたのである。

然し乍ら、三民主義は決して漢人種の制覇のみを目標とはしてゐなかつた。

元來支那は、その周圍に廣大な邊境を有してゐる。之等の地方は多く漢人以外の者によつて占められてゐたのであるし、更に、支那本土に於ても幾多の弱少民族を包含してゐるのである。之等のものを敵とするか、味方とするかは、實に支那統治上の重要問題である。

既に、孫中山は一九二二年一月一日南京における臨時大總統就任式 宣言に「……國家の本は人民にある。漢・滿・蒙・回・藏の諸地を合せて一國となし、漢・滿・蒙・回・藏の諸族を合し、一人となすが如くする、これを民の統一といふ……」と云つてゐる。

彼は、將來、弱少民族乃至被壓迫民族といはるゝものが、遂には強力なる聯盟を結び、その現状を改變するであらうと斷ずる。

「將來の趨勢を観るに、如何なる民族或は國家たるを問はず、壓迫されるものは必ず聯合一致して、強權者に抵抗するであらう。……彼等は同病相憐み、將來は必ず聯合して強暴國に抵抗する事であらう。そしてこの數個の被壓迫國が聯合して強暴國と戦ひ、全世界を壓倒するであらう。」(三民主義二五頁)

彼は更に「世界上には二種の人種がある。一つは十二億五千萬人、もう一つは二億五千萬人で、この十二億五千萬人は他の二億五千萬人の壓迫を受けてゐる。しかし、この壓迫者の行動は逆天であつて順天でない」と云ふレーニンの所言を引用して、支那四億の人民も、この順天の行動に聯合する必要があるかもしれないとさへ云つたが、しかし、その以前に支那は先づ自己の民族的自覺を興起して置かなければ成らないと推斷する。

(註) 一九二三年一月孫文及びジョフエ聯合宣言以後における孫文に對するレーニンの影響は大きい。彼は「黃白戦争の如き人種的の戦争」にもまして、同人種間に於ける「公理と強權」の抗争の可能性を信するに至つたやうである。

崩壊過程をたどる支那にとつては、一切の事態が餘りにも急迫してゐた。かゝる状態にあつては、自己以外の民

族を考慮する餘裕は無かつたのである。蒙古も、西藏も、新疆も——その地方に於ける弱少民族に對して、恐らく孫中山の正義觀は觸れてゐたのであらうけれども、——しかし乍ら、それ等を考へてゐる中には、支那民族自身は解體してしまふ危険があつた。民族主義六講を通じ、孫中山は、弱少民族の共同戦線の必要をば認めてゐるが、しかし、彼自身の積極的な意見は吐露することが無い。「修身・齊家・治國・平天下」的な考へが彼の推論を支配してゐたのである。だから彼は先づ「天下を平らげんと欲せば先づ其の國を始めよ」と云ふ。一國民族主義——所謂民族主義國家の建設——を主張する彼は、弱少民族聯合をも含めたる一切の世界主義・國際主義を排撃する。少くとも、近代的民族國家の完全するまでは、かゝる方法は彼の採らざる所である。

支那に於ては、先づ失ひたる民族主義を復興し、更に之を大に發揚し、然して後、初めて世界主義の實行を論ずべきであるといふのが彼の主張である。

故に、漢民族と支那に於ける弱少民族(又は他民族)との關係に、漢民族の民族的自立が完成せられるまで、一應留保せらる可き性質のものであつた。孫中山にとつては、恐らく彼自身の個人的意見としては邊境弱少民族に對して深き同情を有し、その協力を期待して居つたのであらうが、公然たる意見となるに至らなかつたのは、彼の眼に映じたる「自己民族」が餘りにも危殆に臨んでゐた爲ではなからうか。

そこで、民族主義六講の末尾の章句に、彼は次の様に述べてゐる。

「全國民が奮起して、この所志を貫徹せしむべく企圖するならば、中國の民族は發達することを得べきも、然らざれば、中國の民族には希望なく發達の光明なきものとなる。但し、この濟弱扶傾の壮志を有すれば、將來、強國と成ることが可能である。我國が強國とならば、今日受くる所の、列強壓迫の痛苦を想起して、弱少民族が、同様

の痛苦を受くるに於ては、我等は、その帝國主義を消滅せしめねばならぬ。而して始めて治國平天下を唱へ得るに至る。治國平天下を望むには、先づ民族主義と民族地位を恢復し、固有の道徳によつて平和の基礎を築き、而して世界統一を完成すれば一個大同の政治を行ひ得る。この事たるや、實に我四億萬民衆の大責任である。従つて四億の一分子たる諸君は、正にこの責任を負擔すべきものである。即ち是れが我等民族の眞精神である。」(民族主義第六講)

三民主義全體を通じて、漢民族國家の建設が如何に絶對的必要なるものなるかを強調せられてゐる一面、かくて建設せられたる國家が遂行する王道政治によつて、あらゆる弱少民族が悉く救濟せらる可き可能性ある旨が漠然と述べられてゐるのである。漢民族の國家建設は、必要なのである——而して、漢民族國家内の弱少民族の救濟及びこれとの聯繫は、可能なのである。必要と可能——この思惟の配分こそ、三民主義始祖の弱少民族論の本質をなすものである。

## 六

孫中山のかゝる思想は、その後繼者たる國民黨員によつて引繼がれた。そして、國民黨の勢力が支那政局に對して「決定的」なものとなるまで、變更されることが無かつたのである。何となれば、一九一一—一二年にかけての辛亥革命によつて、清王朝は崩壊したけれども、新支那は孫文一派の考へた様には生れ出なかつたのである。

辛亥革命は異民族の支配から脱せんとする民族主義革命としては、こゝに成就されたものと見てさしつかへない。ところがブルジョア民主主義革命としては甚だ不徹底な中途半端なものとして終つてしまつた。政權は舊官僚軍閥の巨頭である袁世凱のために、すつかり横取りされてしまひ、(佐野前掲書三四三)軍閥跋扈時代となつてしまつた



のである。

「封建制度は瓦壊したが、一九二二年から一九二六年に至るまでは、それに代る可き、そして革命的情勢の諸要求に合致し得る新秩序を創造す可き何等組織立つた政治勢力は存在しなかつた。されば、支那政権の大半は舊制度の残存者達の掌中に收められたのである。彼等は共和制を承認したが、それに屬しなかつた——支那傳統から成る舊世界の如何とも爲し難き崩壊を認めるが、西洋から支那に輸入せられた理念と制度を持つ新世界を諒解してゐなかつた。これ等の人々は、一八九四年舊式試験制度で「秀才」の學位を得た吳佩孚と、滿洲に於ける綠林の徒としてその經歷の一步を踏み出した張作霖であつた。之等二人は、滿洲王朝の退位と、廣東からアムールに至る國民黨の進出との中間、北京に於て政権を握つてゐた軍人・官僚の間に見受けられる、多少共開拓的な姿態を夫々代表してゐた。」(G. F. Hudson: The Far East in World Politics: a study in Recent History 1937 p. p. 206-207)

しかし、一九二六年北伐は完成された。この結果國民黨の實力は漸次強靱となつて、支那政局を左右し得るやうなものとなつて行くと共に、他方、三民主義理論は黨内の「力」の動搖によつて、その内容を支配されるやうに成つて行つた。その「力」の動搖も、幾度か繰返された反蔣戦と赤匪討伐を経て、やがて蔣介石を中心とした國民黨中央派をめぐつて安定しようとし出した頃、三民主義にふくまれてゐた邊境諸民族に對する問題は、支那民族自身に關するよりも、更に重大なるものであると考へられ始めた。こゝに、彼等の民族理論は發展的修正を加へられねばならなかつた。實に彼等國民黨領袖の「力」は、かくの如く命じたのである。

國民政府の建設計畫が進捗するに従つて、國民黨主腦部の胸中には、先づ近代的支那民族國家は最早誕生したのだと考へられた。そして、既に新支那が建設せられたとしたならば、當然、その領土を確定す可き「國境」が先づ明

確にされなければ成らぬと論斷した。

然るに現實の支那は、その周圍をめぐる廣大な「邊境地帯」がある。實に、これは實力を失墜した清王朝の形式的政治權力と、浸滲しつゝあつたヨーロッパ列強の實質的政治權力とが競合した結果、發生したるものに外ならぬ。

今や、新興支那は清朝が失つた「實力」を復興し得たのである。さらば、「邊境地帯」は當然解消す可き筈である。明確なる「國境」を設け、「邊境弱少民族」の對策を立て、一舉に邊境問題を解決しなければ成らない。

國民黨の「邊境對策」及び「弱少民族問題」は、かくして夙に、重要議題となつてゐたのである。既に、國民黨第一全會は、次の宣言を發してゐる。

「國民黨之民族主義、有兩方面之意義：一則中國民族自求解放、二則中國境内各民族一律平等、第一方面：… 第二方面、辛亥以前、滿洲以一民族宰制於上、具如上述。辛亥以後、滿洲宰制政策、既已摧毀無余、則國內諸民族、宜可得平等之結合、國民黨之民族主義、所要求者即在於此。然不幸而中國之政府、乃爲專制余孽之軍閥所盤據、中國舊日之帝國主義、死灰不免復燃、於是國內諸民族、因以有抗阻不安之象、遂使少數民族、疑國民黨之主張、亦非誠意、故今後國民黨爲求民族主義之貫徹、當得國內諸民族之諒解、時時暗示其在中國國民革命運動之共同利益。今國民黨在宣傳主義之時、正欲積集其勢力、自當隨國內革命勢力之伸張、而漸與諸民族爲有組織的聯絡、及講求種種具體的解決民族問題之方法矣。國民黨敢鄭重宣言：… 承認中國内各民族之自治權、於反對帝國主義及軍閥之革命獲得勝利以後、當組織自由統一的(各民族自由聯合的)中華民國。」(國民黨第一次全國代表大會宣言)

(註) 邊境問題と同様に重要なる香港其他に對する歐米勢力の侵入には、觸れる所が少ない。これは、國民政府が國際關係殊に英・米・佛に對する考慮から出でたものに外ならぬ。中國國民黨の列強侵略排撃に關する見界の變遷を物語るもので



ある。この點については、他日再び取り上げる考へである。一九二二年六月廣東で開れた中國共產黨三全大會は國共妥協を暗示する所謂「國共ニ關スル宣言」に於ても、國民黨のこの弱點をついてゐる。曰く

「中國國民黨ハ、國民革命ノ中心勢力デナケレバナライ。ガ、不幸ニシテ從來ノ國民黨ニハ二ツノ缺點ガアツタ。一ハ外國援助ヲ以テ中國革命事業ヲ成就シヤウトスル依頼心デアリ、一ハ軍事行動ヲ以テ革命ノ唯一手段ト考ヘ、ソレニ勢力ヲ集中シテ民衆ヘノ宣傳ヲ輕視シタコトデアル。前者ハ國民ノ獨立自治ノ信念ヲ失ハシメ、國民黨ノ政治的指導地位ヲ危殆ナラシムルモノデアリ、後者ハ國民ノ同情ヲ失ヒ、ムシロソノ反抗ヲ招ク不利ガアル。故ニ吾人ハ社會上ノ革命ハ、須ラク中國國民黨ニ集中シテ國民革命運動ノ實現ヲ早カラシメ、同時ニ中國國民黨ヲシテ外國依頼ト軍事萬能政策ヲ拋棄セシメ、民衆宣傳政策ニ依ツテ國民革命指導者ノ地位ヲ恢復セシメナケレバナライ。中國共產黨ハ從來軍閥打倒、國際帝國主義打倒ノ標的ニ向ツテ國民革命ヲ指導シテ來タ。中國ノ政治經濟狀態及ビ社會各階級ノ苦痛要求ニ鑑ガミ、労働者農民ノ利益ヲ擁護シ、ソレニ對スル宣傳ト組織トヲ吾人ノ特殊ノ責任トシ、彼等ヲ指導ヒテ國民革命ニ參加セシムルコトガ國民革命成就ノ重要條件ト思惟スルヲ以テ、吾人ノ活動ノ中心的使命トスル」

國共合作を定めたる國民黨一全大會(一九二四年一月)から六年を経したる後、三全大會は開催せられた。一九二九年(民國十八年)三月二十七日である。こゝに可決せられたる決議案は、更に對弱少民族の内容を明確に示し、その邊境地方に對する中央の覇權を押し進めて、彼等の民族主義の理論と實踐に、變調の跡を明かにしてゐる。稍々長文ではあるが、その一斑を引用することにす。

「蒙藏與新疆、本黨致力國民革命、即以實現三民主義爲唯一目的、則吾人對於蒙古、西藏及新疆邊省、合實行三民主義外、實無第二要求。雖此數地人民之方言、習俗、與他省不同、在國家行政上、稍呈特殊之形式、然在歷史上

、地理上、及國民經濟上則固同爲中華民族之一部、而皆爲於帝國主義壓迫之地位者也。辛亥以前、滿洲以一民族而宰制於國內各民族之上、而列強之帝國主義、得圖謀侵略而瓜分之、故辛亥革命、其意義爲一方剷除滿洲之宰制政策、一方爲打倒列強之瓜分政策。不幸滿洲既倒之後、國內之軍閥代之而興、列強之帝國主義、一方援助軍閥以壓迫國內各民族、一方變瓜分之說爲共管之說。變武力的侵略爲經濟的壓迫、其結果遂令蒙古、西藏及新疆之人民、在經濟上、政治上、教育上所處之地位、無稍增進。今幸軍閥之惡勢力已被摧毀、中國境內之民族、應以互相親愛、一致團結於三民主義之下、爲達到完全排除外來帝國主義目的之唯一途徑。誠以本黨之三民主義、於民族主義上、乃求漢、蒙、回、藏人民密切的團結、成一強固有力之國族、對外求國際平等之地位、於民權主義上、乃求增進國內諸民族自治之能力與幸福、使人民能行使直接民權、參與國家之政治、於民生主義上、乃求發展國內一切人民之經濟力量、完成國民經濟之組織、解決自身衣、食、住、行之生活需要問題也。大會於此認爲今後宜本此主義之眞義、以全力昭示蒙、藏、新疆之人民、並根據國家生存上共同之利益、努力實現漢、滿、蒙、回、藏諸民族有組織的密接團結、共謀經濟上、政治上、教育上之建設。蓋唯國內民族政治鞏固之力量、始足以戢止國外帝國主義之政治掠奪、唯國內民族經濟及教育充實之力量、始足以排除國外帝國主義之經濟侵略。本黨敢鄭重述明：吾人今後心力矯滿清、軍閥兩時代愚弄蒙古、西藏及漠視新疆人民利益之惡政、誠心扶植各民族經濟政治教育之發達、務期同進於文明進步之域、造成自由統一的中華民國。必如此、庶足以保持中國永久之和平而促進世界之大同也。」(第三次全國代表大會對於政治報告之決議案 民國十八年三月二十七日)

國民黨及び政府は、邊境地帯の特殊的性質を承認する旨に就いて屢々聲明してはゐるが、然もそれは「國家生存」に對して共同の利害を有する所の——支那領土たる點に關しては些も譲らない。

かくして、國民政府は中華民國訓政時期約法に於いて、「中華民國の領土は各省及び蒙古西藏とす。」(同法第一條)と明確に規定してゐる。

既に、新疆・寧夏・青海等の西北諸省は設置せられてゐた。西藏に關しては、一時英・露・支三國間の抗爭場裡となつてゐたが、外蒙人民共和國に對するロシアの勢力圏をイギリスが諒承する代償として生じたる西藏方面に關する英露勢力圏劃定に關する協定により、支那は全面的に敗退して僅に西康特別區域(舊川邊特別區域)を改省する程度に止まつたが、東部及内蒙古に對しては、民國十七年(一九二八年)一舉に中央化して、熱河・察哈爾・綏遠の各省をその治下に收めたのである。

故に、訓政期を終へて、名實共に近代的な新支那が建設した際に施行せられる豫定である中華民國憲法草案は、その第四條において「中華民國の領土は、江蘇、浙江、安徽、江西、湖北、湖南、四川、西康、河北、山東、山西、河南、陝西、甘肅、青海、福建、廣東、廣西、雲南、貴州、遼寧、吉林、黑龍江、熱河、察哈爾、綏遠、寧遠、寧夏、新疆、蒙古及西藏等を固有の疆域とす」と規定してゐる。

(註) 蒙古及西藏とは、既に英露の勢力下にある外蒙及西藏を指すものである。

蒙古・西藏に關しては、既に清朝時代に理藩院あり、後に蒙藏院と改組され、更に國民政府の成立に際して、行政院組織法は同院内に蒙藏委員會を設置せしめて、

一、蒙古・西藏地方の行政に關する事項

二、蒙古・西藏地方の各種改革に關する事項(蒙藏委員會組織法第二條)

に就き適當の處置を講ぜしめた。同會の委員長、副委員長を初め九名乃至十五名の委員の任命權は、一切國民政府に歸屬してゐるのである。(同法 第三條)

孫中山の國族理論は、漢民族の國家建設を目的とした多分に復古的要素を含んだ歴史的國族理論であつた。然るに、孫文以後の國民黨は「漢・蒙・回・藏の人民の密接なる團結によつて強固・有力なる一國族を形成」しようとする考へたのである。それは、支那に生活する諸民族の同化によつて、新しき民族國家を創造しようとするものであるが故に懷古的ではなく、實に發展的な國族理論である。

(註) 孫文は、「反清復明」といふ清末に於ける諸會黨に屢々見受けられる合句を批判する、即ち反清は良いが復明は時代遅れであると云ふのである。(薛農山 前掲書 四四八頁)統治者、王朝に對する彼の考へは、確に進歩的であるが、しかし一度民族問題に成ると、彼は漢民族の復興と云ふ回顧的なものと成るのである。

國族理論の歴史性から創造性への轉化——それは、支那國民革命の段階に沿つた進展に外ならない。更に又、この段階の進展——云ひ換へれば支那資本主義の發展が、諸族同和的な國族理論から一族專制の國族理論へと導きつゝあることも否めない。

兎も角 支那民族問題の核心は、漢民族自身の民族的自立の問題から、漢民族對邊境弱少民族の問題へと移行して行つたのである。そして、その具體的な現實の形態は、軍閥其他一切の封建制への抗爭から、支那の領土高權と特殊性を有する邊境地帯との間の論争へと——政治上の舞臺を轉換したのである。

## 七

然らば、支那民族問題の焦點を移動せしむるものは何か。元來、邊境問題、弱少民族問題の發生する原因は、一國の政治統制力が衰退するか、或は接續してゐる二國間の「權力の均衡」が動搖するかによる。内亂・領土併合・獨立運動といふやうな現象は、斯くして生ずるのであるが、概ね「國家總力」の消長に歸せらる可きものである。

長い歴史過程を経て来た現在の國家は、多くの場合、人的に物的に多分に複合的要素を含んでゐるのである。殊に、一國家の政治的中心から遙かに離れた——所謂「邊境」地帯に於ては、この傾向は著しい。だから中央とは言語・宗教・習俗を異にしてゐる之等「邊境」の文化的複合分子は、國家總力の消長に應じて、時折「邊境問題」として發生してくる素地を形成してゐることは確實である。勿論、それは何處までも素地であつて、邊境問題に具體的な性格を與へるものではないのである、これを具體化せしめる「力」は、國家自體に付隨するものなのである。

(註) 一、に、民族總力或ひは國家總力と云ふのは、單に「民族乃至國家の陸海空軍の裝備——即ち武力だけを意味するものではなく經濟上の能力をも含めたるものである。(Bandy Kumar Sarkar: The Politics of Boundaries p. 15-17)

支那邊境問題乃至邊境民族問題も又、斯くの如き線に沿ふものであつた。云ひ換へれば、近代支那の國家總力の發展が、その儘、邊境地帯に反映して、「問題」の性格を規定するのである。

その力の劣弱なる場合に於て、支那民族主義の内容は「漢民族」のみを内容として、僅に「諸族同和」「民族自由聯合的國家」を主張するのみであるが、その充實するに従つて、その意味する所は、「民族の一部」を構成する「特殊民」をも加へて、著しく擴大されて行くのである。

一國の國家總力が充實し、發展して行くに伴つて、邊境若くは國境方面に對する支配力・統制力が漸次強固となり、邊境異民族に對する指導力が増大して行く——この傾向は、古今を通じて、寧ろ「必然」と稱すべきものではあるまいか。この必然的傾向に對しては、正！ 不正！ の價值判斷を下す可き性質のものでは無いのである。

何故なれば、多くの場合、邊境地帯に於ける弱小民族は、自分丈で立ち上る力——所謂「民族總力」——が劣弱なのである。之に對して、適當な指導力を加増して行く事は、必ずしも不正では無いばかりでなく、「必要」でさへ

あることがある。

だが、この増加しつゝある「指導力」が、邊境民族の意思に合致するか否かは、別問題である。一國家の邊境民族に對する指導力と邊境民族自身の意思とを對比した時、初めて「民族政策」の價值は論ぜられるのである。

同様に、邊境地帯の支配に關する歴史と現實とは區別して考へなければ成らない。勿論兩者の間には、密接な關係のある事は確實である。が、現在邊境又は國境地方に對して支配力の増加したのは、一國の國家總力が増加した結果に外ならない。そこで、過去の或る時代に領土内にあつたが故に、當然、これを自覺した現在に至つて再び支配力が伸長したものだと云ひ難いのである。邊境支配力の増大をもたらすものは、何處までも國家總力であつて「過去の證文」に對する記憶ではないのである。

(註) 中國國民黨が、邊境地方をもつて「歴史上、地理上、及び國民經濟上より中華民族の一部」をなすものであると主張して、その民族政策の強化に對する正統性を「過去」に求めてゐることは正しくない。孫文も元清兩朝に支那が民族的崩壞に墮つたと認めてゐる如く、邊境側から支那本土を眺れば、正反對の論說が成り立ち得るからである。

支那民族主義の政治的表現である邊境地帯に對する國民黨の民族政策の檢討も、かゝる態度をもつて望まねばならない。さすれば、

- 一、支那現實の國家總力は如何なる内容をもつてゐるか、
  - 二、支那邊境地方民族は、如何なる生活を望んでゐるか、
  - 三、支那民族政策は、邊境地帯を如何に導いて行くか、
- の問題が生じてくる。云ひ換へれば第一は支那經濟の發展段階であり、第二は邊境民族の社會經濟段階であり、



第三は、その兩者の結合形態である。

然らば、現在の國民黨の民族政策をどう見るかと云ふ問題であるが——この事は、今次我國が多大の犠牲をも忍びつゝ敢行してゐる聖戦の本義によつても、既に明白なことである。且つ、餘りにも動きつゝある政策自體に觸れるが故に、これを他の機會に譲ることとする。

唯、こゝでは、支那經濟機構の發展に伴つて、その民族主義理論と政策が漸次、その重點を移行して行つたことだけを云ふに止めやう。

八、

民族政策には、二つの型態がある。この事は、第一次世界大戰の導火線となつたオーストリア・ハンガリーとセルビアの關係を見るなれば明かであらう。即ち當時の塹壕關係は、集合民族國家たる塹壕國の自己保存本能と民族統一を翹望するところのセルビアの大セルビア運動との抗争にあつたのである。(神川彦松、世界大戰原因論、九五頁)

兩頭帝國は、その領土内の民族協調を計ることによつて、自國の保全を完うすることも又、進んでその領域を擴大することも出來ると考へてゐたのである。

然るにセルビアは、各地に點々と散在するセルビア民族(スラヴ族)を糾合することによつて、國力の發展、領土の伸長を敢行し得ると考へたのである。

前者は、民族協調政策であり、後者は民族糾合政策である。多くの場合、協調的民族主義は確守的であるのに對し、糾合的民族主義は進取的である。云へば、政治的領域に比してその國家總力が伴はぬ場合には前者が採用せら

れ、その國家總力が過剰した場合には後者が行はれるのを常とする。

この兩政策は、現在に於ても見られる。例へば、チェッコ問題・ポーランド問題をめぐる獨逸少數民族に關する對策である。チェッコスロバキヤ及びポーランド政府は、その領域内の獨逸少數民族に對する保護處置は完全であると屢々力説して、民族的協調を主張するのに對して、獨逸第三帝國は、チェッコ及びポーランド領内の自國民族の壓迫を指摘して、その少數民族の絲をたぐつて、領土の併合を計らんとしたのである。即ちチェッコ・ポーランドの領土保全をば、糾合的民族政策によつて突破しやうと云ふのである。

正に、獨逸が東南歐に對して「人種秩序再編成」を宣言したと傳へられることは、この政策の發展、強化に外ならぬ。

三民主義創始者をめぐる初期國民黨の民族政策は、自己民族——漢民族の發展・確立に汲々として、他を顧る餘裕を持たなかつた。そして、僅に弱少邊境民族に對する政策の萌芽は、「五族協調」といふ協調的民族主義政策にあつた。

然るに、國民政府成立後に於ける後期國民黨の民族政策は、邊境地方に點在する漢民族の歴史的・政治的・社會的紐帶をたぐつて、その領土を押し進めて、漢民族を中心とする近代的新民族國家を建設しようとするものであつた。こゝに「邊境問題解決」の方法は、糾合的民族政策の採用となつたのである。

但し、國民黨主腦部の考へたやうに、支那、現實の國家總力は決して十分なものではなかつた。この脆弱性は、國民黨が眞正面から糾合的民族政策をふりかざして邊境問題を押し切らうとする時、幾多の反撥を蒙る原因となつ



たのである。こゝに、國民黨の民族政策には無理を伴ひ、遂に破端を生ぜざるを得なかつたのである。糾合的民族主義を主張する現代支那に、尙ほ、協調的民族理論と政策の餘韻ある所以である。

## 古版經濟書解題

一千七百五十三年版ロバート・ウォレス著『古代及び現代に於ける人類の數に關する論述』

高橋誠一郎

マルサスの人口論が決して破天荒の大發見ではなく、幾多の先蹤を有するが中にも、殊に、其の原理に於いて、又、是れよりして誘導せられた斷案に於いて正確に彼れの其れと同一なりとすら認められてゐる者にロバート・ウォレスの存することは周知の事實である。マルサス自身も、自己の呈示す可き最重要なる議論が確かに斬新なるものに非ざることを告白し、そがウォレスによつて其の一千七百六十一年の著 *Various Prospects of Mankind, Nature and Providence*. 中に表明せられて居つたことを自認してゐる。然しながら、マルサスの先驅としてのウォレスの業績は、彼れが本書に先き立ち一千七百五十三年を以つて公にせる *A Dissertation on the Numbers of Mankind in antient and modern Times: in which The superior Populousness of Antiquity is maintained. With An Appendix, Containing Additional Observations on the same Subject, and Some Remarks on Mr. Hume's Political Discourse,*